

アルバータ州のテンサイ産業における日系カナダ人の役割

大木 崇

2026 年 5 月 10 日

1. 産業の初期段階

アルバータ州南部におけるテンサイ(sugar beets)産業の起源は、1890 年代から 1900 年代初頭にかけての農業振興に遡ることができる。当時、地元の推進者たちは、昼は暑く夜は涼しいというこの地域の気候が、テンサイ栽培に理想的であると認識していた。しかし、この産業の真の起爆剤となったのは、ユタ州出身の裕福な末日聖徒（モルモン教徒）で鉱業王のジェシー・ナイトであった。彼はハンバグ鉱山で巨万の富を築いていた。宗教的信念と、自給自足の農業コミュニティを築きたいという慈善的な願望に駆られ、ナイトはアルバータ州南部に広大な土地を購入し、1901 年にレイモンドの入植地を設立した。

1901 年から 1903 年にかけて、彼はアルバータ州初の大規模なテンサイ加工工場であるナイト・シュガー・ファクトリーの建設資金を調達し、建設を完了させた。しかし、ナイトの構想は直ちに、そして慢性的な障害に直面した。テンサイ栽培には、過酷で骨の折れる肉体労働が要求されたのである。工場が採算の合う形で稼働するには、1 シーズンあたり 4,000 エーカーのテンサイが必要だったが、初期の農家たちは、低賃金で過酷な畑仕事を耐え抜く意思のある安定した労働力を確保することに常に苦戦していた。当初、中国人労働者を雇用する試みは失敗に終わった。カナダ先住人のブラッド族やペイガン族や、ヨーロッパからの移民も雇ったが、労働力の供給は依然として極めて不安定なままだった。



アルバータ州レイモンドのナイト製糖工場（1901 年～1903 年）

この深刻な人手不足を解消するため、テンサイ畑での労働者として日本人移民が特別に募集され、1903 年や 1905 年には早くもアルバータ州南部に到着した。移住会社、特に日加用達会社は、これらの農業事業に従事させるため、若い日本人男性をこの地域に連れてきた。これが、プレーリー地方における日本人入植の第一波の始まりとなった。当初、これらの移住者の多くは、一攫千金を求め、最終的には日本へ帰国するつもりでいた出稼ぎ労働者であった。

村井忠正は論文¹で次のように述べている：

このレイモンドの製糖工場は 1914 年に閉鎖された。その結果、日本人労働者の一部はブリティッシュ・コロンビア州に戻ったが、約 50 人は未開発の土地を購入し、小麦や野菜を栽培する農業に転じた。当初、テンサイ農場の農場労働者として定住した者たちにとって、自分の土地を所有することは成功への第一歩であった。また、レイモンドでは、土地を取得するための前提条件として結婚が求められていたと伝えられている。写真花嫁の一人は、このことについて次のように語っている。

レイモンド・ナイトはこう言いました。「出身地に関係なく、誰にでも土地を与える。ただしその代わり、飲酒、賭博、そして売春宿のような不道德な場所への立ち入りは絶対に控えること。もし誰かがそのようなことに手を染めたら、土地を取り上げる——それが約束だ。これに同意するなら、君たちのために町を建設してやる」。このため、農地を求めている者たちにとって、妻を持つことは不可欠となりました。当時はそういう時代だったのです。独身男性だけではどうにもならないと考えられていました。「妻がいれば何とかやっていける」と言われた独身男性は「写真結婚」を通じて、妻を娶りました。妻がいなければ土地を自分のものと主張できませんでした。だからこそ、レイモンドでは写真結婚が一般的だったのです。

村井は、レイモンドの写真花嫁たちが歌っていた歌を書きとめた。

1. 妾が嫁いで来たときは

遠い遠い海越えて

着いた港が西の端

奥へ奥へと幾百里

よくも来たぞや平原州

2. 夫一人が頼りにて

朝夕眺める麦の波

地の果染める金色の

沈む太陽の西を見て

ああ父母と呼びし我

3. 去年の不作に今年又

ドライの風は吹き渡る

帰る路金のあらばこそ

まとう着物も色あせて

あわれ貧しき母となる

4. 冬は零下三十度

窓には湯気が凍りつき

今日も暮れ行く雪の中

夜のしじまに聞く音は

餌を求めて鳴くカヨテ

1911 年までに、アルバータ州の日本人人口は 225 人に達し、太平洋沿岸以東のカナダにおいて最大の日本人コミュニティを形成していた。こうした初期の独身者キャンプの人口構成は、1910 年代に、主に写真結婚制度を通じて日本人女性たちが到着したことで、劇的な変化を遂げた。1916 年までに州全体で 25 人に達したこれらの女性たちは、冬には室内の壁に白い水蒸気が凍りつくような断熱されていない住居を含め、凄まじい孤立と過酷な物理的環境に耐え抜いた。しかし、彼女たちの存在によって、一時的な労働キャンプは、自給自足可能な持続的な入植者コミュニティへと発展したのである。

2. 日系カナダ人コミュニティの発展

1910 年代から 1920 年代にかけて、アルバータ州南部の日系カナダ人コミュニティは、賃金労働から農業による自立へと移行した。多くの入植者は、生涯労働者であるよりも独立した農民になることを志し、農地を購入し、モルモン教徒の隣人から灌漑技術を取り入れた。1915 年のナイト・シュ

ガー社解散後、職を失った日本人労働者たちは団結して共同で土地を借り受け、畠中良夫のような大規模な日本人農家は、蒸気動力機械を導入するほどの農業革新者として台頭した。

同時に、コミュニティは永住を支援するための強固な社会制度を構築した。レイモンド日本人協会は 1914 年に設立され、社会福祉の向上、白人コミュニティとの交渉、農業労働者の供給、そして「出稼ぎ労働者としての意識」を脱却するための活動を積極的に行った。沖縄出身の炭鉱労働者による独自のコミュニティが定住していたハーディビルでは、1921 年にハーディビル同志会が設立され、相互扶助が促進された。

1929 年までにレイモンド仏教教会が設立され、この地域の 300 人の日本人居住者にとって精神的・教育的中心地となった。歴史家のダレン・アオキは、これらの初期入植者たちが複雑な二重のアイデンティティを両立させていたと指摘している。彼らはカナダのプレーリー経済に溶け込みつつ、同時に日本の文化的価値観、語学学校、道徳的規律を維持し、英国系カナダ人が主流を占める社会において民族的誇りを保っていたのだ。

3. 太平洋戦争中の日系カナダ人避難民の到着

1930 年代後半までに、戦前のこの 600 人足らずのアルバータ州在住日本人コミュニティは、脆弱ながらも、真のカナダ社会による受容を、ある程度達成していた。彼らは次第に、信頼でき、勤勉で、「良き隣人」と見なされるようになっていた。この寛容さは、レイモンド周辺のモルモン教徒が歴史的に、地元の白人社会から疎外されてきたという経験によって、日本人社会に寛容であったことに部分的に育まれたものであった。しかし、1941 年 12 月 7 日の真珠湾攻撃に続く太平洋戦争の勃発により、この安定は打ち砕かれた。連邦政府は直ちに日系カナダ人を「敵性外国人」に指定し、ブリティッシュ・コロンビア州沿岸の 100 マイル保護区域から約 2 万 2000 人の強制移住を命じた。

それと同時期に、アルバータ州のテンサイ産業は崩壊の危機に瀕していた。戦争の勃発により地元の労働力が枯渇し、東欧出身の労働者たちは 1 エーカーあたり 9 ドルの賃金と団体交渉権を求めて、積極的にストライキを行っていた。この絶望的な労働力不足を解決する好機と見たアルバータ州テンサイ生産者協会は、ブリティッシュ・コロンビア州からの日本人避難民をプレーリー地方のテンサイ農場へ振り向けるよう、連邦政府に対して積極的に働きかけた。

その結果生まれた政治的取り決めは、厳格に功利主義的であり、かつ強い人種差別的色彩を帯びていた。ブリティッシュ・コロンビア州保安委員会（BCSC）は 1942 年 5 月、アルバータ州政府と契約を正式に締結した。その内容は、日本人避難民を完全に管理下に置き、テンサイ農場の労働に専

念させ、レスブリッジのような都市部への居住を制限し、日本のカナダに対する敵対行為の停止から6ヶ月後には、日系人をアルバータ州から追放することを定めていた。地元の白人住民、自治体、退役軍人団体は、この日系人の流入に激しく反対した。「敵性外国人」の恒久的な定住を恐れ、厳格な軍による監視を要求したのである。

1940年代、アルバータ州には、稼働中の砂糖精製所が2カ所あった。ピクチャー・ビュート精製所（1936年開設）とレイモンド精製所（第二次世界大戦中に再開）である。両工場とも、1942年の「テンサイ・プログラム (the Sugar Beet program)」に基づき移住させられた日系カナダ人労働者が栽培したテンサイの加工において重要な役割を果たした。ピクチャー・ビュート・テンサイ製糖工場は、カナディアン・シュガー・ファクトリーズ（BCシュガーの子会社）によって1936年に開設され、1954年まで操業を続けた。この工場は第二次世界大戦中、アルバータ州における主要な製糖工場となり、レスブリッジ・ピクチャー・ビュート地域で栽培されたテンサイを加工した。

レイモンド（ナイト）製糖工場は1901年から1903年に建設されたが、収量の低さと競争により1914年に閉鎖された。しかし、戦時中の砂糖需要を満たすため、第二次世界大戦中に限定的な規模でテンサイ加工施設として再利用された。

現在カナダで稼働している唯一の製糖工場であるテイバー・テンサイ工場は、1950年まで操業を開始しなかったため、1940年代の風景の一部ではなかった。

1942年4月から6月にかけて、およそ2,250人の日系カナダ人（約370世帯）がアルバータ州南部に移送され、戦時中の流入者総数は最終的に3,000人から4,000人に達した。避難民にとって、農場労働を受け入れることは、男性のみの道路建設キャンプや隔離された収容所に分けられることに対する、しばしば唯一の現実的な選択肢であり、それは純粋に家族の生存のためになされた選択だった。

日系カナダ人用テンサイ・プログラムは1942年3月に開始され、ブリティッシュ・コロンビア州沿岸の日系カナダ人家族は、4月からアルバータ州南部に到着し始めた。ブリティッシュ・コロンビア州ミッションからの日本人避難民の第1陣は、コールハースト・ダイヤモンドシティ地域に到着した。第2グループは、ブリティッシュ・コロンビア州ウォナック（ウォナックはブリティッシュ・コロンビア州南西部、フレーザー川北岸に位置するメープルリッジ地区の小さな農村コミュニティ）から到着した22家族計124人で、ピクチャー・ビュートに定住した。3番目のグループは、スティーブストン出身の10世帯約73名で、コールデールに到着した。4番目のグループはニュー・ウェストミンスター出身の23世帯で、レイモンド・マグラス地区へ送られた。6月の第1週までに21グループが到着し、ブリティッシュ・コロンビア州からアルバータ州南部へ移送された日本

人の総数は約 2,250 人、すなわち約 370 世帯となった²。フレーザー川流域からの日系カナダ人家族の多くは農業に従事していた。しかし、スティーブストンからの家族は漁師だった。

これらのテンサイ農場での仕事は、肉体的に過酷で、賃金は低く、極めて疲労のたまるものだった。現代の除草剤や自動化された機械はまだ存在しなかったため、日系カナダ人はほぼすべての重要な農作業を手作業で行っていた。農作業のサイクルは春、最も労働集約的として知られる間引きから始まった。労働者たちは、灼熱のプレーリーの太陽の下、果てしなく続く作物の列に沿って、かがんだり這ったりしながら、正確に、手早く、余分な苗を手作業で引き抜き、20〜30 センチごとに 1 本だけ健全な苗を残さなければならなかった。

夏の間、家族は絶え間ない除草と灌漑の責任を負った。これには、手作業での除草、毎日何時間も硬い土を鋤で耕すこと、そして水門の開閉、水路の破損の修復、作物の浸水を防ぐための畝への水流の誘導といった、灌漑システムの物理的な管理が含まれた。秋の収穫には、想像を絶するほどの忍耐力が求められた。労働者たちは、フックやフォークで土をほぐし、重いビートの一つひとつを手作業で土から引き抜き、ナイフで葉のついた上部を切り落とし、収穫したビートを力任せに、運搬用ワゴンに積み上げなければならなかった。最後に、工場へ納入する前に、手作業でビートを選別し、土やごみを取り除いた。農場の報酬は時給ではなく、エーカー単位で計算されたため、家計を維持するためには、10 歳ほどの幼い子供を含む家族全員が、夜明けから日没まで畑で働かなければならなかった。

この過酷な肉体労働に加え、避難民たちが耐えさせられた生活環境は悲惨を極めた。沿岸部から到着した家族たちは、農家が用意したのが粗末な仮設の住居だけであることに衝撃を受けた。避難民たちは、鶏小屋や豚小屋、穀物倉庫、断熱されていない共同宿舎を改造した場所に収容された。これらの建物は、気温がしばしばマイナス 30 度や 40 度まで急降下するアルバータ州の過酷な冬から、日系人の身を守ることはできなかった。基本的なインフラは事実上存在せず、家族は清潔な水を安定して確保できず、泥だらけでアルカリ性の強い池に頼らざるを得ず、また、不可欠な医療ケアから遠く離れた、人里離れた農村で生活していた。

その結果、避難民世帯の推定 42%は、1942 年の作付け期に冬を越すのに十分な収入を得ることができず、政府の救済金に頼らざるを得なかった。この危機を通じて、レイモンドやハーディビルに数十年間住んでいた戦前の「古参」日系カナダ人たちが、重要な文化的仲介者およびコミュニティのリーダーとして立ち上がった。広中洋一や丸野 T.のようなバイリンガルの指導者たちは、虐待的な農家と、トラウマを抱えた避難民との間の紛争を仲介し、住宅の修繕用木材を確保し、RCMP と

交渉し、敵対的な白人自治体にコミュニティの平和的な意図を説得するために、たゆまぬ努力を重ね、最終的に新参者たちの社会的分断を防いだ。

4. 戦後の日系カナダ人コミュニティの変容

1945年の第二次世界大戦の終結は、アルバータ州の日系カナダ人にとって、社会への再統合と農業の抜本的な変革という、複雑な時代の幕開けとなった。連邦政府は、戦後直ちに日系カナダ人の市民的自由を回復しなかった。その代わりに、日系カナダ人に対し、ロッキー山脈の東側へ移住するか、日本への「本国送還」を受け入れるかを求める分散政策を施行した。全国的に日系カナダ人の43%が強制の下で本国送還申請書に署名した一方で、アルバータ州では顕著な例外が見られた。本国送還を選んだのはわずか15.4%に過ぎなかったのだ。これは、アルバータ州に住む790人の日本国籍者のうち176人が日本への帰国申請書に署名し、432人のカナダ市民のうち46人が署名したことを意味する。しかし結局、政府の送還船³でアルバータ州から実際に日本へ「帰国」したのは、わずか9人であった。

戦前に入植者たちが築いた強固な支援ネットワークに加え、さらなる移住を避けたいという共通の願い、そして徐々に安定しつつあった同州の経済的機会が相まって、避難者の大多数はアルバータ州南部を永住の地とすることを決意した。1949年4月まで、ブリティッシュ・コロンビア州沿岸への帰還が禁じられていたため、多くの家族は、アルバータ州に留まるしか選択肢がなかったが、他にも、地域社会に深く根を下ろすことに成功したために留まった者もいた。

戦後の数十年は、同州における日系カナダ人の農業的・社会的地位が劇的に向上した時期であった。1948年の州選挙権回復と戦時中の制限解除に伴い、コミュニティの人口構成は多様化した。カナダ生まれの若い二世の中には、都市部の専門職、職人、公務員として高等教育の夢を追う者もいたが、多くの家族はこの地域に残ることを選んだ。中には小作農となり、後に土地所有者となった者もいた。彼らはテンサイ栽培に加え、ジャガイモ、アルファルファ、混合野菜、穀物、小家畜へと作付けを多様化させ始めた。

ジャガイモは特に魅力的だった。テンサイ栽培で既に慣れていた手作業を多用する作物であり、安定した地元市場があり、土地所有に向けた資本を蓄積できるからである。1950年代から1970年代にかけて、コールデール・レイモンド・テイバー地域帯の日系カナダ人ジャガイモ農家は、入念な農場管理と安定した収穫量で知られ、地元の選果場、種芋供給業者、地域卸売業者にとって貴重な契約栽培農家となった。

過去 20 年間で、アルバータ州南部のジャガイモ産業は、加工業者の投資、作付面積の拡大、収量の増加に牽引され、劇的に拡大し、この地域をカナダ有数のジャガイモ生産地へと変貌させた。変化の最大の原動力となったのは、マッケイン・フーズ、キャベンディッシュ・ファームズ、ラム・ウェストン、オールド・ダッチ、ペプシコ、シアラー・フーズといった大手加工業者のアルバータ州南部への進出と事業拡大である。現在、アルバータ州のジャガイモ作付面積の 73%以上が、フライドポテトやポテトチップスの加工用として栽培されている。

ジャガイモ栽培も大きく変化した。現在では、契約生産に従事し、より高い貯蔵能力と環境制御施設を備え、精密灌漑や土壌健康モニタリングを実践する、より大規模で資本集約的な農場が主流となっている。小規模なジャガイモ農場は姿を消した。アルバータ州南部には、日系カナダ人のジャガイモ農場がいくつか存在する。現在、ミヤガワ・ファーム社は、アルバータ州南部にある日系カナダ人の大手ジャガイモ企業である⁴。

テンサイ栽培は、大規模な技術的近代化を経て、一世や二世の世代が耐え忍んできた過酷な肉体労働を永久に解消した。精密播種機と遺伝的に優れた種子品種が、手作業による間引きという過酷な必要性を置き換えた。化学除草剤とカメラ誘導式機械耕運機が、手作業による除草の必要性を根絶した。自動ピボット式スプリンクラーが溝灌漑に取って代わり、巨大な自走式機械収穫機により、1～2 人の作業員で 1 時間あたり数エーカー分のビートを収穫・切株・洗浄・積載できるようになった。かつては、大家族総出の必死の労働を要した作業である。

今日、日系カナダ人の、戦時中のテンサイ農場での労働と不屈の精神の、この産業が南アルバータの存続できた一番の要因として記憶されている。現在、アルバータ州は、カナダで唯一、商業規模でテンサイ栽培を継続している州であり、近代化されたテイバーの製糖工場が、国内産テンサイ糖の 100%を加工している。



アルバータ州南部でのテンサイ収穫（2024 年）



The Lantic Sugar factory in Taber, Alta., is a busy place in October as growers' sugar beet harvest is delivered to its door.

アルバータ州タバーにあるランティック製糖工場 (2024)

脚注：

1. 村井忠政、「南アルバータ日系人社会の生成と発展（上）」PP 346－348
2. David Iwaasa, “The Japanese in Southern Alberta 1941-45”, PP 11
3. カナダ労働省 (1947)、『帰還報告書』、付録 B：州別内訳

4. ミヤナガ・ファームの物語

アルバータ州南部テイバー・にあるミヤナガ・ファームの物語は、日系カナダ人コミュニティを長きにわたり特徴づけてきた、不屈の精神、勤勉さ、そして静かな強さを物語っている。宮永一家は、ブリティッシュ・コロンビア州の自宅から強制的に立ち退かされた後、第二次世界大戦の困難な時期に初めてアルバータ州へ到着した。他の多くの日系カナダ人家族と同様、彼らは財産を失い、ほとんど何も持たずに内陸部へ送られた。彼らの新しい生活は、労働が過酷で、将来の見通しも不確かなテンサイ農場で始まった。

戦後、宮永一家はアルバータ州南部に残り、一から生活を再建することを選んだ。彼らは借りたわずか1エーカーの土地で農業を始め、家族の労働力、不屈の精神、そして長年の農業経験で培った技術に頼った。時が経つにつれ、耕作面積を広げ、設備を改良し、徐々に地域で信頼される生産者としての地位を確立していった。

アルバータ州南部のジャガイモ産業が成長するにつれ、宮永家はそれに適応し、ジャガイモ加工へと注力するようになった。この分野では、入念な灌漑、貯蔵管理、そして大手食品企業との長期契約が必要とされた。数世代にわたる着実な努力により、一家は現在「ミヤナガ・ファームズ社」として知られる企業を築き上げた。同社はテイバー地域の大手加工業者にとって信頼されるジャガイモの供給元となっている。彼らの農場はアルバータ州のジャガイモ業界内で高く評価されており、その物語は地元の生産者の貢献を特集した業界史や、ドキュメンタリー映像でも取り上げられている。

5. アルバータ州南部における日系カナダ人の歴史に関する参考文献

5.1 村井忠正、「アルバータ州南部における日本人コミュニティの形成と発展（第1部および第2部）」、名古屋私立大学学術リポジトリ

村井忠正の研究は、ブリティッシュ・コロンビア州の日本人コミュニティと比較することで、戦前から戦時中にかけての、アルバータ州南部における日本人コミュニティの形成を明らかにしている。レイモンド、ハーディビル、コールデールを中心とする南アルバータは、20世紀初頭から日本人移民が定住した地域であり、村井は、その社会構造、経済活動、宗教組織、家族形成、そして地域社会との関係について多角的な分析を行っている。

まず「第1部」において、著者は、南アルバータにおける日本人コミュニティの起源が、鉄道建設労働者や炭鉱夫としてカナダに渡った初期の移民にあることを示している。彼らの多くは、季節労働や出稼ぎのために故郷を離れた、日本の地方、特に九州や沖縄出身の若者たちであった。ブリテ

イッシュコロンビア州の沿岸部では反日感情が強く、漁業や林業に従事する日系カナダ人が制度的な差別に直面していたのに対し、アルバータ州ではそうした感情が比較的弱く、彼らが労働力として受け入れられる余地があった。この違いが、南アルバータに独自の日本人コミュニティが形成される背景となった。

村井は、ハーディビル炭鉱における沖縄出身移民の集中に焦点を当て、彼らが炭鉱労働を通じて地域社会に根を下ろし、その後農業へと移行していった経緯を詳述している。沖縄出身の移民たちは互助のコミュニティを形成し、親族や故郷のネットワークを活用して新たな移住者を呼び込んだ。その結果、南アルバータの日本人コミュニティは、ブリティッシュ・コロンビア州に見られる大規模で多層的なコミュニティとは異なり、より結束が固く、互いに支え合う特徴を持つようになった。

農業への移行は、南アルバータの日本人コミュニティの発展における重要な転換点となった。炭鉱労働の不安定さと危険を避けるため、多くの日系カナダ人は小作農や小規模農業に転じ、テンサイ栽培が主な生計手段となった。テンサイ栽培は労働集約的で家族の手を必要としたため、勤勉さと家族協力の精神を重んじるアルバータの日系コミュニティの文化に合致していた。村井は、アルバータの日系人がダテンサイ栽培を通じて地域経済にどのように貢献し、農地を取得することで徐々に独立した農家となっていったかを詳細に分析している。

「第2部」では、宗教、教育、社会組織の形成について論じられている。レイモンド仏教寺院の設立は、南アルバータの日本人コミュニティの精神的支柱となり、儀式や文化行事を通じてコミュニティの結束を強めた。さらに、日系カナダ人の子供たちの教育に関しては、英語教育が優先された一方で、日本語学校や家庭教育を通じて文化的アイデンティティを維持しようとする明確な努力が見られた。

村井はまた、1930年代の大恐慌が南アルバータの日本人コミュニティに与えた影響についても分析している。農産物価格の下落と雇用の不安定さは深刻であったが、日本人コミュニティは家族総出の労働と儉約によってこの危機を乗り越え、むしろ地域社会における地位を高めた。村井は、こうした努力が、その後の戦時下におけるコミュニティの受容性に影響を与えたと指摘している。

戦時中の強制移住に関して、村井は南アルバータがブリティッシュ・コロンビア州からの移住者を受け入れる地域となったことを強調している。確立された日系カナダ人コミュニティが存在したため、1942年以降にそこへ移住した日系カナダ人はある程度の支援を受けることができた。しかし同時に、彼らはテンサイ栽培産業において労働者として搾取されることにもなった。村井は、戦前の

入植者と戦時中の移住者の間に生じた緊張や階級格差にも触れ、それによって南アルバータにおける日系カナダ人コミュニティの複雑な構造を描き出している。

全体として、村井の研究は、南アルバータの日系カナダ人コミュニティが単なる「戦時移住の受け皿」であったのではなく、戦前から独自の歴史と文化を持つ地域コミュニティとして確立されていたことを明確に示している。彼の分析は、日系カナダ人の歴史においてしばしば見過ごされてきた南アルバータの重要性を浮き彫りにし、地域史、移民史、およびエスニシティ研究に重要な貢献をしている。

5.2 David B. Iwaasa, “The Japanese in southern Alberta 1941-45,” *Alberta History*, Summer 1976, Volume 24, Number 3

（デビッド・B・イワサ、「南アルバータの日系人 1941-45 年」、*アルバータ・ヒストリー*、1976 年夏号、第 24 巻第 3 号）

デビッド・イワアサの研究は、戦前の小規模な始まりから第二次世界大戦中の劇的な拡大に至るまで、アルバータ州南部の日系カナダ人コミュニティの変遷をたどっている。1941 年以前、アルバータ州に住む日系カナダ人は 600 人未満で、主にレイモンドとハーディビルに集中していた。1900 年から 1920 年代初頭にかけて到着したこれらの初期入植者たちは、農業や鉱業に従事し、徐々に社会的な受容を得ていった。1930 年代後半には、安定した家庭、二言語を話す子供たち、そして特にレイモンドのモルモン教徒の農家との協力関係が、このコミュニティを地域社会に溶け込ませる一助となった。

1941 年 12 月の真珠湾攻撃は、このもろい受容関係を打ち砕いた。日系カナダ人は公の場で忠誠を誓ったものの——レイモンドの指導者、広中洋一は「ここは我々の故郷だ。我々は 100 パーセントカナダを支持している」と宣言した）にもかかわらず、恐怖と疑念が州全体に広がった。同時に、アルバータ州は深刻な農業労働力不足に直面していた。1942 年に連邦政府がブリティッシュ・コロンビア州沿岸からすべての日系カナダ人の強制移住を命じた際、アルバータ州のテンサイ農家は労働力不足を補うため、避難民の受け入れを積極的に要請した。しかし、彼らの支援には条件があった。農家たちは、連邦政府による厳格な監督と、戦後避難民が退去するという保証を強く求めたのである。

1942 年 4 月から 6 月にかけて、約 2,250 人の避難民——およそ 370 世帯——がアルバータ州南部に到着した。多くは、水道の設備が不十分で医療ケアも限られた仮設の避難所に収容された。テンサイ栽培には一世帯あたり複数の労働者が必要だったため、多くの家族が冬の生活維持に苦しみ、

42%が救済措置に頼らざるを得なかった。自治体は移動制限を課し、レスブリッジなどの町では避難民の公共施設への立ち入りを禁止しようとした。

レイモンドやハーディビルに古くから住む日系カナダ人家族は、重要な仲介役を果たし、新参者が地域の緊張を乗り越えるのを助けた。戦後、連邦政府の分散・国外退去政策がコミュニティを脅かしたが、アルバータ州の帰還率は低かった。1948年までに日系カナダ人は州の選挙権を獲得し、その後の数十年で、日系カナダ人のカナダ文化への同化が、日本文化の喪失への懸念を招く中でも、日系カナダ人は、アルバータ州の市民生活や文化活動に積極的に貢献するようになった。

5.3 Ann Sunahara, *The Politics of Racism*, Chapter 4: Exile

(アン・スナハラ著、『人種差別の政治学』第4章：追放)

日系カナダ人は1942年に太平洋沿岸から追放され、特別列車によるシステムを通じて収容所へと送られた。その列車は「バンクーバーを満員で出発し」、空っぽになって戻ってくるもので、最初は男性たちをブリティッシュ・コロンビア州、アルバータ州、オンタリオ州の道路建設キャンプへ、その後、家族全員を内陸部やプレーリー地方のテンサイ農場へと移送した。このテンサイ計画は、戦前の農業労働力の44パーセントが失われたアルバータ州とマニトバ州における深刻な労働力不足から生まれたものであり、プレーリー地方の農家は、フレーザー・バレーの日本人たちを、理想的かつ管理しやすい労働者と見なしていた。人種差別や戦時中のヒステリー、「ハテライト派問題」との比較に根ざした激しい地元からの反対にもかかわらず、家族離散を避けるため、3,600人以上のフレーザー・バレー出身の日系カナダ人が、追放が一時的なものだと信じてテンサイ作業に志願した。

しかし、彼らの到着はトラウマとなるものだった。家族は農家によって恣意的に選定され、多くは「古くて断熱されていない穀物倉庫や鶏小屋」での生活を強いられ、過酷な環境、アルカリ性の水、そして搾取的な雇用主に耐えなければならなかった。1942年から43年の冬にかけて経済的苦境はさらに深刻化し、アルバータ州で追放された日本人の90パーセントが極度の困窮状態に陥り、42パーセントが救済措置に頼る事態となった。アルバータ州とマニトバ州の両方で、日系カナダ人たちは集会禁止令にもかかわらず密かに組織化し、「マニトバ日系人合同委員会」やアルバータ州の「遠藤正吾会」といった委員会を結成して、より良い労働契約、就学の機会、移動の権利を求めて交渉を行った。

一方、アルバータ州の日本人——長年定住していた住民——は、新参者たちに自宅や教会を開放したが、オタワが移動制限、検閲、不動産売却禁止など、あらゆる制限を「日本民族」に拡大した

際、彼ら自身も処罰を受けた。マニトバ州では、市民指導者、YWCA、YMCA、ユダヤ人コミュニティからの支援により、社会への統合が円滑に進んだ。

5.4 新保満、『石に追われるように』、第6章、D節（東京、お茶の水書房、第2版、1996年）、大木崇訳、japanesecanadians.ca にて閲覧可能

この節では、新保氏が収集した、第二次世界大戦中および戦後のアルバータ州南部におけるテンサイ農場での日系カナダ人の物語を紹介しており、これらは他に類を見ないものである。新保氏は、戦後なぜ日系カナダ人がアルバータ州に留まることができたのかを、次のように説明している。

1945年頃、テンサイ農家の労働力構成は、日系カナダ人が65%、ドイツ人捕虜が18%、その他が17%であった。戦争が終わると、ドイツ人捕虜はイギリスへ送還された。ヨーロッパから帰還した兵士たちは、「テンサイなんて関わりたくない」と言った。他の人々もまた、他の産業へと移っていった。結局、南アルバータのテンサイ農場に残ったのは日系カナダ人だけとなった。テンサイ栽培農家協会は州政府に対し、日系カナダ人のアルバータ残留を認めるよう請願した。南アルバータの農家の票に支えられた社会信用党政府は、これを無視できなかった。こうして、日系カナダ人は戦後、アルバータ州に定住することを許された。

新保氏は、テンサイ農場での日系カナダ人家族の生活を生き生きと描いた永田文子の回想録を掲載している（当ウェブサイトホームページの「石に追われるように」を参照）。